

妥当性のある看護学実習評価のあり方

— ルーブリック評価導入に向けた取り組みからの考察 —

蒔田寛子 大島弓子 大野裕美
山口直己 五十嵐慎治 小俣由佳
福嶋美貴 堀元美紗子

要旨

第28回日本看護学教育学会交流セッションでの取り組みを基に、看護学実習評価の信頼性や妥当性を高める上で、ルーブリック評価を導入することの困難さや有効性について検討し、改めて看護学実習、ならびに看護学実習評価のあり方について論考した。

実習は複数の教員が同時に関わるという特徴をもつため、評価にばらつきが生じやすい。対策として丁寧な話し合いを重ね、ルーブリック評価表を作成することがあり、この取り組みが教員の教育力向上につながると考えられた。しかし表現方法によって、学生は評価項目の理解が困難であり、教員の期待する評価の視点を持っていないため適切なフィードバックに活用できない可能性がある。ルーブリック評価表は双方からの分析を行い、誤差が生じないような表現の工夫が必要である。

実習において、記録が実践に伴わないことも多く、学生の記述能力によるところが大きい。このようなルーブリック評価の限界を意識しつつ、看護実践と実習記録は不可分の関係であることを心得ておくこと、そしてルーブリック評価表にそれらのバランスを考慮したうえで明示しておくことが求められる。

今後はルーブリック評価を実習目標に相応しい内容に修正することについて、論理的思考で取り組みたい。

キーワード：看護学教育 (Nursing Education) 看護学実習評価 (Clinical Practicum Evaluation) ルーブリック評価 (Rubrics)

I. はじめに

看護学教育における実習では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りながら、ケアニーズを持つ対象者と実際に相対し、看護を実践する。その中で対人関係形成に必要な能力、専門職者としての役割や責務を果たす能力を獲得していく。このように看護学実習は看護実践能力を培う上で、極めて重要な授業形態の一つである。

日本看護系大学協議会 (2017) は、地域包括ケア時代に向けた新たな看護学実習のあり方として、「ディプロマポリシー / 卒業時到達目標・コアコンピテンシーを反映した実習構成の必要性」をはじめとする5つの示唆を示している。また、これらの結果を受け、看護学実習のあり方について基準を提案しており、「実習によって学生が習得すべき能力を具体的に明示す

ること」「実習の評価方法、評価基準が明確であること」という視点が盛り込まれている。看護実践というパフォーマンスを評価する上で、複数の教員が関われば教授の視点も様々であり、学習者も実習で何を学習するのか、という点が共通認識の基に為されなければ、実習評価の信頼性や妥当性が十分に確保できないという事態を招いてしまう。ゆえに、客観的な評価指標を用いて、評価の一貫性や公平性を保つこと、学習者の学習目標を示すことが求められている。

このような要請に対応した評価の一つにルーブリック評価がある。そもそもルーブリック評価は、米国で開発された学習評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあるとされている（文部科学省,2012）。

本学看護学科では、昨年来、看護学教育の質向上に向け、アセスメントポリシーの策定に取り組んでおり、アセスメント指標の一部として、パフォーマンスの評価に適しているとされるルーブリック評価に着目し、看護学実習評価への導入を試みた。また、第28回日本看護学教育学会交流セッションにおいて、看護学実習におけるルーブリック評価表の作成を題材に、作成の手順、作成上の困難さを共有することで、看護学実習評価の学習を深めてきた。

そこで本稿では主に、第28回日本看護学教育学会交流セッションでの取り組みと参加者からのアンケート評価を基に、看護学実習評価の信頼性や妥当性を高める上で、ルーブリック評価を導入することの困難さや有効性について検討し、改めて看護学実習のあり方、ならびに看護学実習評価のあり方について論考する。

II. 交流セッションの実施

まず、第28回日本看護学教育学会学術集会での90分の交流セッション、「妥当性のある看護学実習評価のあり方——看護教員の教育力向上に向けて——」について報告する。

- ・交流セッション前半は、開催に至った趣旨の説明と、「看護学教育における実習評価」「ルーブリック評価」についての講演を行った。
- ・後半は、本学で使用している成人看護学実習（慢性期）のルーブリック評価表を提示し、グループワークで1つの評価項目について模擬的に評価基準を作成した。

III. 交流セッション参加者のアンケート結果

1. 調査対象と調査方法

交流セッション参加者に研修内容についてのアンケート調査を行った。アンケート用紙は交流セッションの資料とともに配布し、終了後に各自で回収箱に投函してもらった。

2. 調査内容

調査内容は、参加者の所属機関、交流セッション参加の理由、ルーブリック評価についてイメージできたか、ルーブリック評価を今後活用できるか、交流セッションに対する意見である。

3. 分析方法

項目ごとに単純集計を行った。自由記載については、意味内容の類似性にそってまとめた。

4. 倫理的配慮

アンケート用紙は無記名とし個人が特定できないようにした。参加者には、アンケートの目的と方法、アンケートへの回答は自由意志であること、得られた結果は資料・報告などで使用することについて、交流セッションの開始時に口頭で説明した。アンケート協力への同意は調査用紙の回答をもって得られたと判断した。なお、研究遂行に際し、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

5. 結果

交流セッション参加者に研修内容についてのアンケート用紙 210 部を配布し、回収は 59 部（回収率 28.1%）であった。

1) 所属機関（表 1）

参加者の所属機関は、専門学校が最も多く 42 名（71.2%）であり、大学 10 名（16.9%）、病院 5 名（8.5%）、その他 2 名（3.4%）であった。

表1. 所属機関

機関	n=59	
	人数	%
専門学校	42	71.2
短期大学	0	0.0
大学	10	16.9
病院	5	8.5
学生(大学院生含む)	0	0.0
その他	2	3.4

2) 交流セッション参加の理由（表 2）

交流セッションに参加した理由について、参加者の多くは、実習評価への関心が高く、学生の思考力や主体性を客観的に評価することができるルーブリック評価に関心を示していることが伺えた。

表2. 交流セッション参加の理由（複数回答）

項目	n=59	
	人数	
ルーブリック評価に関心があったから	34	
実習評価に日頃困っているから	31	
実習評価の作成を考えているから	21	
他校の実習評価に興味があるから	10	
その他	3	

3) ルーブリック評価についてイメージできたか (表3)

ルーブリック評価については、イメージできた15名(26.8%)、ややイメージできた36名(64.3%)であり、多くの参加者がイメージできたと回答していた。

表3. ルーブリック評価についてイメージできたか

項目	n=56	
	人数	%
イメージできた	15	26.8
ややイメージできた	36	64.3
余りイメージできなかった	5	8.9
イメージできなかった	0	0.0

4) ルーブリック評価の今後の活用 (表4)

ルーブリック評価の今後の活用については、そう思う17名(29.8%)、ややそう思う36名(63.2%)であり、多くの参加者が今後活用できるとしていた。

表4. ルーブリック評価の今後の活用

項目	n=57	
	人数	%
そう思う	17	29.8
ややそう思う	36	63.2
余り思わない	4	7.0
思わない	0	0.0

5) 交流セッションに対する意見

交流セッションについて自由記載で求めたところ、27件の回答があり、交流セッションに対する意見(表5)と、ルーブリック評価についての意見(表6)の2つに分けられた。

表5. 交流セッションに対する意見

主な意見(件数)	記述内容
効果的なグループワーク(5)	<p>グループワークがありよかったです。</p> <p>グループワーク楽しかったです。指導もわかりやすかったです。</p> <p>人気があるテーマであることは今日の交流セッションからもわかり、しっかりとグループワークに参加したかった。</p> <p>グループワークを行ったことで、他の学校の教員と共有でき学びになりました。</p> <p>グループワークでルーブリックに詳しい方がいたので、話し合いで理解が深まった。</p>
活用への期待(2)	<p>作成のポイントが見えて活用できそうです。</p> <p>今日は自分たちで作成してみたが、いろいろな例で検討してみたい。</p>
また参加したい(1)	<p>ぜひまた機会があれば参加したいです。</p> <p>グループワークがあつたが、自分自身が理解できていなかったため、話し合うまでになれなかった。とても残念である。せっかくのグループワークのため、もう少し具体的な説明がほしかった。</p> <p>グループワークにファシリテーターがいなかったので不完全な終わり方だった。ルーブリックを作成する上でのポイントを示してほしかった。例えば、「5」から作り、順に下していくなど、様々は方法(例)を示してもらえると、もう少し話が進んだように思う。例が1項目では、それに捉われてしまう気がした。</p> <p>グループワークの難易度が高く、グループの方に教わったことでルーブリック評価のことが少し理解できました。「実習評価のあり方」ということだったため、困った点や、どう考えたらよいのか話し合えるとよかったという感想です。</p> <p>ルーブリックについて自分の学習不足でグループワークで有効に意見できなかつた。</p>
時間不足(3)	<p>もっと時間があつたらよかったです。少しイメージできました。</p> <p>時間が短かつた。</p> <p>楽しかつたです。時間が短くて残念でした。ファシリの先生が上手かつた。</p>
内容の相違(1)	<p>実際に自分たちで考えるということ自体には大きな意味があつたと思いますが、想像していたセッションとは違い戸惑いました。妥当性に焦点を当てて話し合うのかと思つていたので。</p>
難しい事例(1)	<p>グループワークの事例としては難しかつた。</p>
事前準備の不足(1)	<p>資料の準備数や会場定員数は事前に準備しての方がよい。追加で配布していただけたのはよかつたですが、事前配布の方が資料が活かされたと思つます。</p>

表6. ルーブリック評価についての意見

主な意見(件数)	記述内容
評価基準は3段階か5段階か(3)	ルーブリックには0はつけられないので、私たちの学校では、「できない」→1は実習に参加していることで評価していますが、1をとる学生は皆無です。また、段階もその領域により3～5になるかと思いました。 ルーブリックの5段階が妥当なのか、3段階でと指導を受けたことがある。見本の3のレベルが合格ラインであれば、「できない」ではなく、指導を受けて「できる」の表現がよい。 実際に実習に取り入れて実施しています。5段階で考えるのは難しかったです(私の学校は3段階)。
点数配分はどうするか(1)	評価項目10点基準、1～5の点数配分でどうしたらよいのか?例えば、「5」なら10点で「4」なら8点とした場合、9点はどうやって採点するのか?
評価内容の抽象度やどの程度にするか(1)	基準の内容が抽象的であり何が到達できたらOKとするのか、もっと具体的に基準を作成した方がよいのか迷うところです。
到達目標をどこに設定するか(1)	到達目標をどこにおくかが難しい。学校としての教育と学生のレディネスレベルとどう釣り合わせるのか。
作成後の課題(1)	作成までに至っても、活用すると様々な問題が出てくるのではないかと。
授業形態の違いによる作成方法の違い(1)	ルーブリック評価の考え方が、実習と講義や技術演習のパフォーマンス評価における作成方法は異なるのでしょうか。さらに評価について学びを深める必要性を感じました。
ルーブリック評価の有効性(1)	学生と評価を共有する意識を教員が持つために、学生と評価項目について話す必要がある。中間評価でどの様になればよいのか伝える時、現状を客観的に捉えるためにもルーブリックは有効だと思う。

交流セッションに対する意見では、〈効果的なグループワーク〉〈また参加したい〉などがあり、グループワークを行うことでルーブリック評価についての理解が深まっていた。一方〈難しい事例〉からは、ルーブリック評価についての知識不足からグループワークでの内容をいかにすることができない参加者もいた。また〈グループワークが不完全〉〈時間不足〉〈事前準備の不足〉など、交流セッションを運営する上での課題についての内容もあった。

ルーブリック評価については、〈評価基準は3段階か5段階か〉〈点数配分はどうするか〉のように、評価基準の段階設定、点数配分について検討が必要と感じていた。また〈到達目標をどこに設定するか〉〈評価内容の抽象度をどの程度にするか〉のように、到達目標と評価内容の表現に関する意見があった。

IV. 考察

1. ルーブリック評価表作成の方法論

1) 実習の到達目標のレベル設定

ルーブリック評価表を作成していく中で、実習の到達目標を明確化していくことが求められ、それは教員側が学生にどこまでのレベルを求めるべきかを明確にしていくことである。アンケートの結果でも「到達目標をどこにおくかが難しい」などの意見が挙げられていた。しかし看護学実習は、講義等の授業と比べ複数の教員が同時に関わるという特徴をもつこともあり、教員による評価の価値観のばらつきを統一していくことは困難な場合が多いと考えられる。そのため、ルーブリック評価表を作成していく際には、教員が話し合いを重ね、教員間でのコンセンサスを得ていく過程が必要不可欠である。ルーブリック評価は複数の教員で担当する授業や論文等パフォーマンス特性のある授業の評価に向いていることが報告されている(沖,2014)。しかし、完成したルーブリック評価表を用いて評価していくことだけが教員間の評価の一貫性と公平性を確保するものではなく、作成する過程そのものが、実習に関わる教員の評価のコンセンサスを得ることにつながっていたと考えられる。大井ら(2018)は、評価尺度の作成過程において重要なのは、教員間での話し合いを通して、各評価尺度の具体的イメージを共有することで、相互の実習評価に関する価値観に気づき、教員全体で一致に向かう筋道を辿り、評価価値の偏りを避ける尺度として合意に至ったことであると述べている。担当教員による話し合いと、相互の合意を得ていく過程がすでに教員の評価の質向上につながると考えられる。

2) 評価基準の設定

(1) 評価指標や段階の明確さ

ルーブリック評価表を作成していく上で、「基準の内容が抽象的であり何が到達できたらOKとするのか」「評価する項目10点基準、1～5の点数配分をどうしたらよいのか」など学習到達度をどの視点で見ると、その指標を明確にしていくのは困難であるとの意見が多かった。ルーブリック評価はパフォーマンス特性のある授業に対して、テスト法では困難な「思考・判断」「関心・意欲・態度」「技能・表現」という観点の評価に向いているとされている(沖,2014)。しかし、実際の看護学実習においては、評価の視点として学生の発言や技術、実習姿勢などのパフォーマンスもさることながら、実習記録という成果物による評価も同時に行われている。その多くの評価指標を織り込み、なおかつ重み付けをしていくことは困難を極める。山田ら(2015)は、ルーブリック評価に記載された記述語は、現場で起こりそうな多様な出来事を想定して書かれているが、必ずしもすべて織り込めるとは限らないと述べている。評価の視点を学習者が明確に意識できる点については大きなメリットであるが、それらから外れてしまったパフォーマンスについては評価されにくく、より質の高いパフォーマンスも生まれにくくなってしまいう可能性もある。そのため、ルーブリック評価の妥当性を担保するには、作成、活用し、その後の振り返りにより修正を繰り返して精錬させていくことが必要である。

(2) 評価指標の表現の記述

ルーブリック評価は、学習者の学習活動や自己評価の指針としての役割をもち、学習者自身が課題を発見し、自ら改善できると述べられている(沖,2014)。アンケートでも「学生と評価を共有する意識を教員が持つために、学生と評価項目について話す必要がある」「中間評価で

どのようになればよいのか伝える時、現状を客観的に捉えるためにルーブリック評価は有効だと思う」などのルーブリック評価の有効性について挙げられていた。看護学実習の評価は、総合的評価のみでは実習体験のプロセスの中で学生個々の学びの質の変換を評価できず、形成的評価が重要であるとされ（古城・木下,2013）、看護学実習の形成的評価として学生の自己評価を取り入れる有用性が述べられている。ルーブリック評価を用いることで、教員と学生との評価に対する共通理解が図られ、学生も自分に何が足りないのか、自分が向かうべき方向性がわかり、次のステップへの動機付けになると考えられる。しかし表現方法によっては、学生は評価項目の理解が困難であり、教員の期待する評価の視点を持たないため適切なフィードバックに活用できない可能性がある。実際、横井ら（2017）は、学生の自己評価と教員評価との関連について、評価の基準の表記において行動レベルのレベル差が曖昧なため、過小評価や過大評価という誤差が生じやすかったのではないかとし、誤差が生じないような質的情報の表現の改善や学生個々に誤差が生じている理由を追求する必要があると述べている。作成したルーブリック評価表は教員、学生の双方からの分析を行い、教員と学生の間で内容的な理解に誤差が生じないような表現の工夫が必要である。

2. ルーブリック評価における看護実践と実習記録

今回の交流セッションのグループワークでは、実践と記録の評価指標および基準について、どのようにルーブリック評価表に記述すればよいのか、その妥当性はどうか等の質問の声がかがっていた。看護学実習は看護実践と実習記録で評価するが、その兼ね合いで戸惑うことが多い。例えば実習記録はできているが実践はできない、またその逆の場合などの評価である。そのためここでは、看護実践と実習記録との関係に焦点をあててルーブリック評価における妥当性を検討したい。実習では実践態度と並び、その実践記録である実習記録が指導および評価データとして重要な意味を示している。なぜなら、実習記録は実習後に提出する完了報告記録の意に限定されないからである。実習記録は、学習目標を達成する支援としての機能があり、実習中に教授活動のツールとして活用することにより、その記載内容から学生の学習成果を把握することが可能となり、教員も必要な情報を学生にフィードバックすることができるため、学生の学習活動を促進する重要な要素として考えられる（高橋ら,2014）。だが、一方で実習記録の指導方法によっては学生の学習意欲の低下や自己効力感の低下をもたらし、負の影響を与えかねない（飛田,2001）。

ゆえに、実習において実践と記録は一体であると考えられるが、指導現場からは実践と記録が伴わないとの指摘がある。

したがって、妥当性を検討するためにも、なぜ、看護実践と記録に乖離が生じるのかということ再考しなければならない。学生の実施した看護が、記録にすべて網羅されて正しく記述されていれば問題ないが、往々に実践と記録の乖離が散見されている現状がある。場合によっては、日々の対象者とのかかわりは臨床指導者からも褒められているのに、記録にはそのかかわり状況が反映されておらず記述にかなりの指導を要する学生も存在している。また、その逆も存在する。実践と記録は別々のものではないにもかかわらず、学生の状況をみると実践と記録が分断されている傾向にある。

その要因のひとつには、まず学生本人の記述能力によるところが大きいことである。これに

関しては、実習記録に何を記述していくのかルーブリック評価表に明確に示しておくことが方策となり得る。目指すべき到達目標に向かって、実践していくための方向性とそのための記録についてルーブリック評価表に記述しておくことである。例えば、評価指標に記録様式との関連を示し、「○○について関連図を用いて説明することができる」等の具体的な学習課題を明確にしておく、学生も迷わないで済むであろう（山田・遠藤,2017）。その際、記述能力に関連する思考の育成も視野に入れておく必要がある（滝島・森,2015）。

ただし、限界も想定される。臨床現場での実践を想定してルーブリック評価表に記述しておくものの、臨床ゆえの不確定な要素はすべて盛り込めるとは限らない。むしろ、ルーブリック評価の基準を唯一とすることにより、実習での看護実践を窮屈なものとしてしまい、創造性を奪うことになりかねない。ゆえに、ルーブリック評価の限界を意識しつつ、看護実践と実習記録は不可分の関係であることを心得ておくこと、そしてルーブリック評価表にそれらのバランスを考慮したうえで明示しておくことが求められる。

3. 看護学における実習の位置づけ

次に看護学における実習の位置づけについて検討する。教育とは、社会の側からの統制・維持の作用と、個人の側からの発達・適応・創造という2つの作用を弁証法的に実現する社会的なものとみである（寺崎,1998）。さらに看護学教育学会（2016）では、看護学教育について、以下のように定義している。「看護学教育とは、看護実践の質の保証あるいは改善のために、看護職を志向する者および看護職の資格を有する者を対象として、看護学の体系に則って展開される教授学習過程である」。看護学教育学会の定義をふまえると、看護学基礎教育の目的は、看護学生が人間的にも発達し、社会に貢献できるような看護職となることといえる。

実践の科学である看護学基礎教育は、講義・演習・実習の大きく3つの教育方法からなる。講義で学んだ知識をふまえて、演習で看護技術を学び、それらを基に臨地実習で、知識・技術を統合し看護職としての対象理解、倫理観、看護実践能力など多くの学びを得る。そして臨地実習は、実在する対象への直接的な看護実践の体験を与える学習であり、看護実践能力の修得上、重要視されている（文部科学省,2002）。

今回ルーブリック評価表作成を通し、看護学基礎教育の中での看護学実習が確かに効果的に看護実践能力を修得することになっているか改めて考察する機会となった。看護学実習は、看護実践の体験ができる貴重な学習方法であるが、5段階評価基準を決定する際、どの程度のレベルを5とするのか、教員間でも意見が分かれていた。特に実際の学生指導を考えてみると、評価基準の決め方で、合格点に達しない学生が多くなってしまいう危惧があった。看護学実習での看護実践能力修得の基準はどこにおくのがよいか、つまり看護学実習の目標をどのように設定するかが非常に重要であることを改めて確認した。

また、深山ら（2018）が、主体的に学習活動に取り組む学生は、ルーブリック自己評価表の使用頻度が高かったと報告している。ルーブリック評価を活用し、実習目標を到達できるように実習での看護の実際をリフレクションしながら、自己の課題を見出し学習する姿勢は、自律した学習活動の継続につながると考えられた。ルーブリック評価の特徴である自己評価での活用は、看護職が自己研鑽に努め続ける基礎的な姿勢を養うことにもつながり、看護学における実習の位置づけとして、重要であると考えた。

さらに看護学における実習の位置づけとして、教員が看護学教育について検討する機会でもあったと考えた。長峰ら(2018)は、ルーブリック評価への取り組みが、教員にとってもより丁寧に学生に関与・観察・指導・支援する意義のある機会となったと述べている。つまり実習は、学生の課題と成長を通して自らの指導力および看護学教育のあり方をリフレクションできる機会と考えられた。ルーブリック評価を取り入れ、学生とともに中間評価と最終評価を行うことで、課題が明確化し、共有できるとともに、学生は明確な課題を基に後半の実習に取り組むことができ、より意欲的になる。教員は、このような丁寧に学生に向き合う経験を通し自身の教育力を向上させる機会となると考えた。

4. 今後の課題

今回は、ルーブリック評価を看護学実習評価に取り入れることについて、学術集会での交流セッションの結果も含めて報告した。本学ではルーブリック評価を看護学実習評価に取り入れることを始めたところであり、取り入れた領域に相応しい評価表を作成し、学生・教員間で有効に活用するには数年かかると思われる。今後は、そのプロセスの一環として、ルーブリック評価を実習目標に相応しい内容に修正することに向けて、論理的思考で取り組む必要がある。

引用文献

- 深山華織,岡本双美子,中村裕美子他(2018).在宅看護学実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果,大阪府立大学看護学雑誌,24(1),49-56.
- グレッグ美鈴,定廣和香子,佐々木幾美他(2016).一般社団法人日本看護学教育学会「看護学教育制度関連データベースの作成」事業報告「看護学教育の定義」の検討過程,日本看護学教育学会誌,26(1),97-104.
- 飛田かおる(2001).臨地実習における実習記録に関する看護学生の学び——学生のインタビューから記録に対する看護教員の関りを考える——,神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録,26,189-196.
- 古城幸子,木下香織(2013).老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して,新見公立大学紀要,34,15-20.
- 文部科学省(2002).大学における看護実践能力の育成の充実に向けて,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm(アクセス:2018.10.30)
- 文部科学省中央教育審議会(2012).新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け,主体的に考える力を育成する大学へ——(答申)用語集,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf(アクセス:2018.11.04)
- 長峰伸治,成松美枝,高橋佐和子(2018).本学養護教諭課程履修学生のルーブリックによる自己評価——ルーブリックの作成と実施について——,聖隷クリストファー大学看護学部紀要,26,7-17.
- 日本看護系大学協議会(2017).「看護系大学学士課程における臨地実習の先駆的取り組みと課題——臨地実習の基準策定に向けて——」報告書:平成28年度文部科学省大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業,
<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/H28MEXTProject.pdf>(アクセス:2018.10.30)
- 沖裕貴(2014).大学におけるルーブリック評価導入の実際——公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して——,立命館高等教育研究,14,71-90.
- 大井千鶴,諸田直実,今泉郷子他(2018).成人看護論実習評価におけるルーブリック作成過程の実際,武蔵野大学看護学研究所紀要,12,49-55.

- 高橋裕子,松田安弘,山下暢子他(2014).看護学教員による実習記録へのフィードバックに関する研究——学生が学習活動の促進につながったと知覚する記述内容に焦点を当てて——,群馬県立県民健康科学大学紀要,9,13-33.
- 滝島紀子,森智恵子(2015).新卒看護師の看護実践上の困難点と仕事の現場で求められている能力の関係,川崎市立看護短期大学紀要,20(1),33-43.
- 寺崎昌男(1998).教育.平原春好,寺崎昌男(編).新版教育小事典(pp57-58),東京:学陽書房.
- 山田香,遠藤和子(2017).成人看護学実習(慢性期)におけるルーブリック評価の作成と試用,山形保健医療研究,20,41-52.
- 山田嘉徳,森朋子,毛利美穂他(2015).学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討,関西大学高等教育研究,6,21-30.
- 横井和美,伊藤あゆみ,生田宴里他(2017).成人看護学実習にルーブリック評価を活用したことの有用性——学生自己評価と教員評価との関連からの検討——,日本看護学教育学会誌,26(3),13-24.